

あの日、あの空、あの飛行機雲

森田昌樹

亮介が野球の練習から帰った時、台所で父の健介と婆ちゃんのスミが喧嘩をしていた。亮介も難しい年頃になって私の手に余るようになった。私は女だから年頃の男の子の考えていることがよく分からない」

「と言って僕が亮介を連れて歩く訳には行きませんよ」

「今までどこをほつき歩いていたんだい」

「どこと言って東京を中心に北海道や沖縄、時には香港やベトナムだったり」

「いい歳をして根無し草の困った男だよ」

「それが僕だから仕方ないですよ」

「あなたには子を思う親心なんかあるのかい」

「僕なりの愛情はありますよ」

父が前に家に帰ってきた時は平和公園の樹々がうつすら雪化粧をしていた。だから半年ぶりのことになる。あの時も同じように父とスミとはすぐに喧嘩を始めた。

『本当に圭子も詰まらん男に引かかったものさ。その面つらでどこかの女のヒモでもやっているんだろうよ』

父が嫌いなスミはいつもそう毒突いていた。

『ふん、面が何だ。男は甲斐性が一番だ』

父は息子の亮介から見てみても端正な顔立ちをしていた。

「夫婦間の関係なんて他人から見てもなかなか分かるものじゃありませんよ」

口の立つ父も負けてはいなかった。

「ふん、何て言い草だい。言っとくけどここは私の家だからね。私のことを他人扱いる男にはこの家に出入りして欲しくないね」

「あなたに会いに来たんじゃありません。妻の圭子に線香を上げたかったし、亮介の顔も一目見たかったです。心配しないで仏壇に参って亮介に会えば出ていきますから」

「亮介ならそこにいるよ」

亮介は台所の入り口に立っていた。

「おう、亮介、元気が。背が高くなったなあ。

父は亮介のユニフォームの肩を叩きながら言った。中学生になって亮介の身長はどんどん伸びた。今は父と並んでも同じ位だった。

亮介は久しぶりに会う父に飛びつきたかった。しかし、父と仲の悪いスミが側にいる。亮介はどんな顔をして良いか分からなかった。父は笑いながら亮介の頬を抓った。

その後父は居間へ入っていった。中央には母の写真を置いた仏壇がある。母はスミによく似ている。気の強そうなところも同じだった。その写真に向かって父が低い声で頻りにお経を唱えている。

父の読経はお寺のお坊さんのようだ。母の法事にやって来たお坊さんが、伴奏する父のお経を聞いて感心していたことがあった。なんでもスミによるとあちこちを放浪している間、お寺に住み込んでいた時期があったらしい。台所で父の読経を聞いてみると、意味が分からないながら涙が出てきそうになる。

「お腹空いただろう。着替えをして夕ご飯を食べな」

スミは食卓の上を指さした。今晚も代り映えのしないカレーライスだった。スミは商売は上手かったが料理は下手だった。棟続きのパチンコ店の仕事が忙しく手の込んだ料理を作る時間が無いというのもあった。亮介は育てて貰った手前文句は言えなかった。

食事後、亮介は部屋に入って机に向かって数学の教科書を開いた。亮介はこの四月に中学三年生になった。当然高校受験を控えている。で、机に向かうのだが、眠くて仕方ない。一度二度と居眠りをしてはハツとして目が覚めた。それに数学の問題はとて難しくてチンプンカンプン理解できなかった。

亮介は勉強はあきらめた。明日邦彦に聞こうと思った。邦彦は少年野球のチームメイトだが、勉強が良く出来て秀才と呼ばれている。居間を覗くと父はもういなかった。

裏の公園に出た。そこでバットを振った。

少年野球の新井監督には素振り千本が日課とするよう厳命されている。

新井監督は、亮介達少年野球チーム『基町カープ』の監督だった。高校時代甲子園に出場して準決勝まで進んだことがある。地元のプロ野球球団である広島カープにスカウトされ入団した。しかし、球団では余り活躍しなかった。怪我をしたのだ。間もなく退団し監督の伯父の経営しているこの町にもう一軒あるパチンコ店『ソウル会館』の手伝いをしていた。手伝いといっても用心棒みたいな仕事だった。監督は用心棒が似合いそ

うな大きな身体をしていた。『あの男とは余り付き合うな。ライバルの店の用心棒だし、朝鮮人だ』とスミは言う。でも新井は亮介にとっては憧れの人だった。短い期間とはいえ仮にもプロ野球選手だったからだ。

スミの経営するホールからは玉のジャラジャラという音や歌謡曲のレコードの音が聞こえてくる。大音響だったが小さい頃から耳慣れている亮介には気にならなかった。

公園の周囲には、原爆で焼け出された人達が住んでいる。『原爆スラム』と呼ばれるこの一帯には掘立小屋のような家が乱雑に並んでいる。この町の再開発が始まってもう何年が経つのだろう。停滞しては止まり、それから又ゆつくりと進んでいった再開発もそろそろ終期を迎えている。戦後ももう三十年が経とうとしている。立ち退いた人達の住む高層住宅ももうすぐ完成する。その高層住宅に住まない、この町を離れてどこかに家を見つけた人達がどんどん引越して行く。町がなくなるのだ。何となく落ち着かない。そんなざわついた雰囲気がこの町を覆っていた。

公園に同じ少年野球のチームに属する勝次がバットを持ってやって来た。勝次は小太りの体格をしてゆつくりした喋り方をした。

「亮ちゃんのお父さんが店にいるよ」

勝次の両親は公園の側で『平さん』という居酒屋をやっている。父がいると聞いて、亮介は『平さん』へ走って行った。バットを担いだ勝次も続いた。

店には父がいた。その他の客は十人程いた。皆近所に住んでいて顔見知りばかりだった。父の隣には診療所の鈴木先生が座って一緒に飲んでいた。鈴木先生は父の同級生で、界限ではドクターと呼ばれていた。顎鬚を生やし話すときはその顎鬚をしごく癖があった。

「……そうですか、健介さん。矢っ張り外人のはデカイですか」

勝治の父の平さんがおでん鍋をかき混ぜながら言った。一年に何回も帰らない父であったが、近所の人達は皆親しみを込めて健介さんと呼んでいた。平さんがかき混ぜると下のタレの浸みこんだ竹輪や蒟蒻が頭を出し、まだタレの浸み込まない具が沈んでいた。

「そうだよ。日本人のものとは比べものにならない。インドでのことだよ。インドではクンプメーラといって五十五日間河で身を清める沐浴の慣習があるんだ。男達は沐浴を終わると岸に上がってサリーに着替えるんだ。その時例のモノが見えたんだ。それがデカイのなんのって」

「デカいたってどれ位」

「それが膝まで届く位なんだ」

「えっ、膝まで届く。それは〇〇〇じゃなくて棒だよ、棒」

店にいる客がどっと笑った。

「やめてくださいよ、健介さん。勝次もいるんですから」

勝次の母が困った顔で父を制する。

「健介、止めるよ。亮ちゃんもいるぞ」

ドクターも肘で父の脇腹を突いている。

父はやっと店の隅にいる亮介に気付いた。そしてにこりと笑った。義母であるスミの前では絶対に見せない父の笑顔だった。

続いて平さんが少し卑猥な表情を浮かべながら言った。

「そう言えば、健介さん。うちの勝次がですね。あそこがデカくなって毛まで生えてきやがったんですよ」

「そうか、勝ちゃんも大人になったか」

勝次が顔を真っ赤にしている。

実はこの自分達の肉体の変化は少年達の深刻な話題だった。中学生ともなれば当然肉体は子供から大人に変化する。しかし現実のその変化は結構気色の悪いものだった。

『触ったり見たりするのが怖い』

『グロテスクで醜悪な生き物みたいだ』

自分達の股間の変化に、少年達は身が竦む思いだった。

「亮介のあそこはどうだ」

父が悪戯っぽく笑いながら言った。しかし、亮介は笑わなかった。

「何だ、亮介、恥ずかしいのか。恥ずかしがることないさ。男は皆同じ道を通って大人になるんだからな」

『そうではないのだ』、亮介は叫びたかった。父とこんな話なんかしたくなかった。久しぶりに会ったのではないか。もっと他に話すことはたくさんある筈だ。それなのにこんな居酒屋で、卑猥な話で、それも自分達の年頃の一番デリケートな話題でからかうなんて。

亮介は店を飛び出した。大きな笑い声がどっとその背に追いかけてきた。

翌日、父は又この町から姿を消した。亮介には父がどこに行ったか、今度又いつ帰ってくるか分からなかった。父はいつも風のようにやって来て風のように去って行った。

夏休みが来た。夏休みの始まってまもないある日の練習の後、ずらりと並んだ選手の

前で新井監督から話があった。

「今年の夏休みは三次ファイターズとの練習試合に行く。三年生はその三次ファイターズとの試合が最後になる。その後は受験があるから勉強に集中しろ。だがいいか、練習は怠るな。高校では野球部でも活躍して貰わなければならないからな」

基町カープにはこのような遠征が年に何度かあった。少年野球チームとしては、広島では強豪チームの一つである基町カープには練習試合のオフアールがかなりあった。

ある土曜日の朝、貸切の小型マイクロバスに乗り込んだ。三次までは遠く、途中の交通渋滞も考えて今日は三次の旅館に泊まることになっていた。

果たして国道は大渋滞であった。亮介達はそんな渋滞など関係無しにシートにもたれ掛かって熟睡していた。なにしろ今朝は朝早く起こされて、眠くて仕方なかったのだ。

午後三次に着くと運動公園で練習をした。亮介達は公園を十周走り、百球の投げ込みをし、監督の打つノックを浴びた。

旅館に戻るともう夕暮れだった。すぐに夕食が始まった。ここではみんな底なしの食欲で何杯もご飯のお代わりをした。みるみるうちにお櫃が空になった。

食後風呂に入ると後は寝るだけだった。

『明日は試合だから、皆早く寝ろよ』

新井監督からはそう言い渡されている。しかし、泊りがけの試合は嬉しくて皆興奮して眠れなかった。掛け布団を跳ね上げて、喋ったり、枕を投げ合ったりして騒いでいた。「まだ、起きているのか。いい加減にしろ」

新井監督が覗いて怒鳴る。皆、監督は怖いので一瞬静かになる。

「おい、勝次、大丈夫か。寝る前に小便に行っておいた方がよろしいぞ」

監督が勝次に言う。勝次には夜尿の癖があるのだ。これまでの泊りがけの遠征でも何回か布団を濡らしたことがある。それを知っている監督が勝次に注意をしたのだ。

「中学生にもなって寝小便たれ」

「勝次、十回ぐらい小便に行つてこい」

皆が囁し立てる中を勝次はトイレに立って行った。

「本当にもう寝ろ。電気を消すぞ」

そう言いながら監督はスイッチを切った。監督はこの後三次ファイターズの監督と三次の町に飲みに出ていった。トイレに行った勝次が暗闇の部屋に戻ってゴソゴソと布団にもぐり込む音が聞こえた。

さつきまで騒いでいた癖に皆寝付きは早かった。直ぐに寝息や鼾が音高く聞こえてきた。

真夜中のことである。亮介はなにやら騒がしい声で目を覚ました。皆が部屋の隅で一塊になってゴソゴソやっている。

「電気は付けるな」

「障子を少し開けて廊下の明りを入れろ」

亮介が声の方を見ると、皆の中央に勝次が下半身を剥き出しにされていた。

「寝小便たれの癖に大きな○○○だ」

「毛もいっぱい生えているぞ」

みんな勝次の○○○を見ながらひそひそと言っている。そのうち邦彦が勝次の○○○を触り始めた。

「おい、触ったら大きくなったぞ」

「おい止めろ。大きくなったら小便が飛び出てくるぞ」

「俺、お父さんから聞いたけど、大きくなって出てくるのは小便じゃないらしいぞ」

「じゃ、何だ」

「知るもんかい」

突然、気持ちよさそうに寝ていた勝次が目を覚ました。皆、勝次が目を覚ますとは思っていなかった。だから勝次のパンツを元に戻して、何食わぬ顔をしておく暇が無かった。勝次は最初はきよんとしていたが、直ぐに下半身の事情を察知した。勝次は大声で泣き始めた。皆、どのようにしたら良いのか分からなかった。単なる悪戯だったのにこんなことになって自分達の方こそ泣きたかった。

ふすまを開けて外出から帰った監督が顔を出した。監督の顔は赤かった。

「どうしたんだ」

「勝次が寝小便をしたんです」

気転の利く邦彦が答えた。

「寝る前に済ますように言ったのにやっぱり出たのか」

「違います。違います」

勝次が泣きじゃくりながら首を振る。哀れな勝次の姿を見て、監督にも何が起きたか分かったみたいだった。

「勝次、お前○○○をいじられたのか。良いじゃないか。お前が泣くから皆面白がるんだよ。逆に自慢してやれ。デカイのは大人になった証拠だからな」

そう言いながら監督はズボンのチャックを外して自分の○○○を見せた。

「デカイだろう。いずれ皆大人になったらこれぐらいのデカさになるんだぞ」

それは息を呑むような大きさだった。皆監督の突然の行動にあっけにとられた。誰も

声が出なかった。

勝次も泣き止んだ。度肝を抜かれて目をバチクリさせていた。その癖、完全に泣きやんでいないのでしゃっくりも続けていた。

夕食後、亮介が眠気を我慢しながら勉強机に向かっていると勝次が家にやって来た。

「亮ちゃん、からかいに行こうや」

『からかい』とは川向こうの中学校の塾帰りの女子生徒を待ち伏せて話し掛けるのだ。

勝次に誘われて、亮介もこれまで二、三度付き合ったことがある。相生橋では既に何人かの少年野球チームのメンバーが待っていた。

薄暮の相生橋は人通りが多かった。

「来た、来た」

勝次がひそめた声で言った。紙屋町の方から塾帰りの四、五人の女子中学生が一塊になつて歩いてくる。

彼女達の一人が待ち伏せに気が付いた。途端に彼女達は猫が獲物を狙う時のように身構えた。小娘ながら殺気のようなものを発散させながら歩いてくる。その癖何がおかしいのかクスクス笑っている。

「ねえ、今度映画見に行かない？」

勝次が声を掛けた。

「券なら持っているよ」

「いやよ」

彼女達はなおもクスクス笑いながら、しかし中の一人がはっきりと断った。

「どうして？」

「あんたとは嫌よ」

「誰となら良いんだよ」

「そうね。佐久間君ならまあまあね」

彼女は邦彦の姓を言った。

「でも一番良いのはね。浜田君」

彼女は続いて亮介の姓を言った。邦彦も亮介も顔が真っ赤になっていた。

「何だ、ブスばかりの癖に」

のけ者にされた勝次は彼女達を毒づいた。

「ふん、ブスで結構よ。それよりあんたおねしよを直しなさいね。あんたのおねしよはうちの学校でも有名よ」

彼女達は一斉に笑った。勝次は泣き顔になっていた。

少年達を翻弄しながら彼女達は立ち去った。暫く歩いた後、此方を振り返り又大声でどつと笑った。

帰り道、勝次は面白くなさそうだった。

「良いなあ、亮ちゃんはもてるから」

彼女達に鼻もひっかけられなかったのが気に入らなかったのだ。

暫く歩いた後、勝次がふと小声で言った。

「そりゃそうと、亮ちゃんのお母さんが死んだのは自殺だったんだって」

「何、自殺？」

亮介は吃驚して大声を上げた。

「何も知らないぞ。どこで聞いたんだ」

「お母さんが言ってたと思う。ひよっとして聞き違いかなあ」

勝次は亮介が気色ばんだのでドギマギしていた。勝次にしてみれば娘っ子達に袖にされてむしろくしゃするるので、何気なく余計なことを口を滑らしたのだろう。

その後、亮介は勝次が何を話し掛けても口を結んだまま答えようとしなかった。

亮介の母は亮介が産まれて間もなく死んだ。しかし、亮介は母が何で死んだかは知らない。スミに聞いても教えてくれない。誰に聞いてもそのことになると口を濁す。そのように変に隠されるとよけい知りたくなる。だからこの件はずっと亮介の心にひっかかっていた。

家に帰ると、亮介は直ぐにスミに聞いた。

「僕のお母さん、自殺したという話があるけど本当？」

スミは亮介が帰ったのでホールから出てきた、亮介に下着を渡しながら言った。

「風呂に入りな。汚れ物は休みの日に纏めて洗濯するからカゴに投げときな」

亮介はもう一度聞いた。

「ねえ、お婆ちゃん、どうなの」

スミは大きな溜息をついた。聞こえてはいたのだ。

「誰がそんなこと言った。今度そいつに言われたらそれがどうしたと言ってやれ」

スミはそう言い捨てるとホールの方に戻ってしまった。とり付くしまなどなかった。

亮介は追求するのは止めた。

翌朝、亮介が顔を洗っていると、スミが台所から近付いてきた。

「お前ももう年頃だからいつか本当のことは言わないといけないと思っていた。でも私には出来ない。お父さんが今度帰ったら聞いてみな。お母さんの死の原因を作ったのはお父さんだから。それにお父さんはお前の父親なんだからちゃんと話す義務がある」

スミの顔には困り果てたような表情が浮かんでいた。みたこともないスミの表情に驚いて亮介はただ頷くだけだった。

三年生は受験勉強に集中できることになっても、亮介は肝心の勉強に全然身が入らなかった。机に向かっていてもすぐに眠くなった。

そうこうしているうちに夏休みは終わってしまった。受験については新井の保証があるので気にならなかった。亮介はひたすらいつ帰るとも知れない父を待ち続けた。帰ったら一番に母のことを聞かねばならない。婆ちゃんはあれから亮介を避けている風だった。

この年、地元球団の広島カープの調子が良かった。被爆後の焼け野原に生まれたこの球団は、資金不足の貧乏球団、セリーグのお荷物球団と言われたこともあったが、近年力をつけ、優勝も狙える球団になっていた。そこには監督に就任した古葉の名采配があった。カープは快進撃を続けた。そしてとうとうリーグ優勝までしてしまった。

帰ってこない父を待つ亮介を救ったのは、この地元球団の活躍だった。他の広島市民と同じように亮介も熱狂した。新聞に掲載されたカープの記事は残さず切り抜いてスクラップに貼り貯めたり、試合の時はテレビに何時間でも囁り付いたりした。

「亮介、勉強は？」

心配したスミが注意しても亮介の耳には空念仏だった。

邦彦の父の自転車屋が引越しをすることになった。南部の港町の宇品で貸店舗を見付けそこで同じ自転車屋を開くことになった。

亮介と勝次は受験勉強中であつたが引越しを手伝いに行った。店では店頭に並んでいた自転車をトラックに積み込みの最中だった。邦彦も一緒になって積み込みを手伝っていた。

邦彦の父が立ち働いている息子を顎でしゃくりながら亮介と勝次に向かって舌打ちをした。

「邦彦の奴が拗ねていやがる。皆と同じように高校に行きたいって」

亮介は大きな声に冷や冷やした。邦彦の耳に父親の話はどう聞こえているだろう。

「自転車の俸が高校なんか行くことはない。それより立派な職人になる方が先だ。行きたけりゃ夜間高校でも行けば良い」

邦彦は汗だけで自転車を積んでいる。まだ一人前になっていない身体だし、要領の会得もしていないし時々足がふらついている。

「おい、邦彦、命より大事な商品の自転車をそんな粗末に扱うな」

父は走り寄って邦彦の頭を帽子で叩いた。

「少し位勉強が出来るからって図に乗るな。自転車も持ち上げられなくて一人前の自転車屋になれるか」

邦彦はタオルで汗を拭きながら父に叩かれるままになっていた。亮介は邦彦がタオルで汗と一緒に涙も拭いている気がした。

店の帰り、亮介も勝次も言葉少なかった。

「邦彦、可哀相だな。あんなに勉強ができるのにもったいないな」

勝次がぼつんと言った。

勝次の両親の経営する居酒屋平さんも閉店することになった。一家は平さんの郷里である呉に帰ってやはり居酒屋を開店することにした。父親は根っからの板前だし、引退するほど老いてはいなかったし、それなら賠償金を元手に再出発しようということになった。

最後の夜は賑やかだった。人の良い平さんはこれまでの愛顧に応える意味でお客の飲み食いはすべて無料にした。但し常連客が押し寄せるので一人二時間に制限した。

常連客が集まった。その中には当然のようにドクターもいた。

基町カープの少年達も招待された。

「おい、皆、食べる前に一寸聞いてくれ」

新井は少し改まった表情になって言った。

「実は基町カープを解散する。この町に人がいなくなるんだから仕方ないな。これから皆それぞれの場所で野球をやって行ってくれ。それが俺の願いだ。俺の方は、韓国に行く。韓国でもプロ野球が出来る。自分にその手伝いをしてほしいと頼まれている。韓国は俺の母国だ。俺の経験が母国のお役に立つのならこんな嬉しいことはない。…さあ、お待たせ。皆、頂こう。腹一杯食べろよ」

育ち盛りの少年達は待つてましたとばかり料理を食べ始めた。

「おい、勝ちゃん、お代わり」

「俺にも」

汗だくで店の手伝いをしている勝次に次々に追加を頼んだ。

皆がたらふく食べて、少し苦しくなったお腹をさすっている時、意外にも亮介の父が現れた。父は店内にいる亮介に気付いて笑いながら手を振った。

「やあ、健介さん、東京からわざわざ」

勝次の父が大きな声を上げた。

「こんな特別の夜だもの。何をさておいても駆けつけますよ」

父は客席のドクターを見つけるとその隣が指定席のようにして座った。

亮介は変な気がした。自分もスミも父の居所を知らない。しかし他人である平さんやドクターは知っている。他人の方が肉親である自分達より父と親しい。亮介は父とは何者だろうと思った。

亮介はチームのメンバーが帰った後も、父が店から出てくるのを待っていた。今夜こそは母の死の真相を聞こうと思った。店の暖簾の前には順番を待つ客用の椅子が何脚か並べてある。その一つに座り冬の寒空に震えている星を見上げながら待っていた。しかし、満腹の腹を抱えて座っているとだんだん眠くなってきた。

どのくらい経ったのだろう。父に揺り起こされて目が覚めた。

「お父さん、お母さんは自殺で死んだって言うのは本当なの？」

それを聞くために待っていたのだから、何をさておいてもその質問をした。

父は吃驚したような表情でじっと亮介の顔を見ていた。

「亮介、それを話せば長くなる。今夜は父さんのホテルに泊まらないか？」

父は亮介の肩を抱きながら言った。

「だからお婆ちゃんにそう言ってきたきなさい。お父さんは先にホテルに帰るから」

ホテルは平和公園の対岸、元安橋のたもとにあった。亮介は頷いて店に走って帰った。いつものホールのカウンターにスミは座っていなかった。亮介は台所に回った。今夜は亮介は平さんの店だからスミは一人で食事をしているのだろうと思った。しかし亮介がそこで見たのは死んでいるスミだった。スミは茶碗の上に覆いかぶさって死んでいた。横向きにした顔の口の周りにはご飯と何やら泡のようなものがこびり付いていた。

亮介は父のホテルに走って戻った。

「警察には僕が連絡しよう。ドクターにお前が知らせてくれ。僕と一緒に店を出たからもう診療所には帰っているはずだ」

父は意外な素早さで亮介に指示をした。亮介はドクターの診療所に走った。夜空から雪が舞い降りている。息が切れた。苦しくなって口を開けた。冷たい雪片が唇に触れた。

スミの葬儀は、ホールに隣接する自宅で取り行なわれた。

スミは生前、『私は騒音の中で死にたい。みんな五月蠅いと言うけど、私にはこの玉の音が一番好き』と言っていた。それでホールは開店したままだった。葬儀の間ホールの騒音がけたたましく響いて来た。

スミの遺志であり、いかにもスミらしいと皆変に納得して騒音の中での葬儀となった。スミは界限では男勝りの名物ばあさんで通っていた。金貸しまがいのことまでしていたが、不思議に人には嫌われなかった。それで弔問客がひきも切らなかった。

喪主は父が努めた。急な事で借り物の喪服に身を包んだ父は別人のようだった。お寺さんへの連絡、葬儀屋との交渉、帳場の仕切りとときばきとこなした。

お寺さんの読経や弔問客の焼香と葬儀が進められた。亮介は父の側に座っていた。最後の父の挨拶は弔問客達の涙を誘った。

夫を原爆で亡くし、一人娘を育て、その娘を喪い、一人で孫を育てたスミ。がむしゃらに働き通しに働いた。人からは様々に言われたがそう生きるしかなかったスミ。父は時々言葉に詰まりながら弔辞を述べた。

亮介は父が普通の大人らしく振る舞ってくれるのが嬉しかった。

『今回は長くないといけないから』

スミの葬儀を済めた後、父はそう言ってホテルから実家に移って来た。亮介は生まれて初めて父と同居することになった。一人暮らしを続けている父は家事には慣れていた。掃除洗濯、料理まで器用にやっつてのける。料理などスミの作るものよりはるかに美味しかった。亮介はたらふく食べた。

基町カープの解散も決まり、亮介は少し野球への熱を失っていた。新井からは練習は続けろと言われていたが、時々思い出したように素振りをするだけだった。運動不足になった亮介はあっという間に肥ってしまった。

そうは言いながら父との生活はどこか落ち着かなかった。父のこれまでの不安定な生き方からしてこの生活は長続きしないと亮介は感じていた。もちろん父との同居は嫌なものではなかった。やはり側に父が居てくれることは嬉しいことではあった。

経営者のスミが死んだので平和会館は閉店するしかなかった。市の担当者が来て、ホールの解体の日程を打診してきた。警察への届出、業者への支払、店員の解雇等の閉店事務も父はときばきとこなしていった。

「遺産整理をしてみるとお婆ちゃんが随分なお金を残してくれていたのが分かった。だ

から亮介、大学にいつてもいいぞ。というよりお婆ちゃんは亮介を大学に行かせるために貯めたんだから行かなきゃならないな」

父は預金通帳の束を見せながら言った。

「このお金で東京に家を購入して一緒に住もう。それまで住む家を探さなければならぬ。高層住宅に申し込むことにしよう」

入居はすぐに許可が下りた。元々がスラムの住民のために建てられた住宅だったから当然と言えば当然だった。

年末、高層住宅が完成した。次々にスラムの住民が引っ越ししていく。父と亮介も身の回り品だけを持ってコンクリートもまだ乾ききっていない新居に引っ越しをした。

正月には父が作ってくれた雑煮を食べた。金回りの良くなった父がお揃いの背広と喪服を作ってくれた。亮介は生まれて初めて着る背広だった。父と亮介はそれを着て護国神社に初詣に行った。

亮介達の引っ越しを待ちかねたように平和会館が取り壊された。父と亮介が高層住宅に引っ越した翌日にはもう解体業者による取り壊しが始まった。一、二、三日で三十年近くスミが不眠不休で守り続けたホールは姿を消した。取り壊すとするとあつという間だった。

近辺にはまだ何軒かの仮設住宅が残っていた。それが立ち退くと後には広大な広場ができる。そこには図書館や市民プールなどの運動施設や文化施設が次々に建設されていく。再開発事業はいよいよ最終段階だった。

残務処理が一段落すると父は部屋でぶらぶらしていた。何時間も机に向かい、本を読み、なにかしら原稿に書いている。それ以外はドクターの家に行つて酒を飲んでいた。

亮介の方も次第に落ち着かなくなった。父はこのまま広島に住んでくれるのだろうか。住んでくれるなら『あの件』はいずれ話してくれるだろうから急がなくてもいいだろう。しかし、父がこのままでいるはずはないと思った。そして父が次第にそわそわしているのが手に取るようにわかった。

そしてとうとう父は切り出した。

「亮介、お父さんに仕事が入った。ベトナム戦争のルポルタージュを書く仕事だ。お父さんはベトナムに飛ばなければならぬ。ベトナム戦争はアメリカの敗色が濃厚だ。その歴史の現場のど真ん中に立ってほしい。それにベトナム戦争はお父さんのライフワークでもある。だからこれをお父さんの代表作にもしたい。亮介分かってくれ。お父さんはベトナムに行かなければならないのだ」

父は熱っぽく語った。

亮介は父がこんなことを言い出すのは半分覚悟していた。しかし、お婆ちゃんの死のごたごたで『あの件』がそのままになっている。それは一瞬たりとも忘れたことは無かった。

「お父さん。お母さんは何で死んだの？」

亮介は泣きたい気持で聞いた。

「それは、亮介。実はお父さんにも分からないのだ。事故死とも自殺ともとれる死に方だった。お母さんは八丁堀のデパートの最上階から転落したのだ」

それを聞いた亮介は不思議な気持だった。何となく自殺よりは事故死の方がまだあきらめきれぬ感じがする。しかし、亮介はどこにも力の入らない脱力感を覚えた。

亮介の表情をじっと見ていた父は亮介を抱きしめた。

「お母さんの死はお父さんにもショックだった。お母さんはお父さんを責めていた。でもお父さんにはお父さんの生き方しか出来ない。これはお父さんの業なのだ。と言って愛情が無いわけでは無い。お父さんは亮介のことがとても好きだ」

父は涙を流しながら言った。

「お父さんはお母さんから貰った手紙を持っている。東京に帰ったらそれを送るから」
父はそう言い残し東京へ出て行った。これまでと違うのは、父が三カ月余り広島に滞在したことで東京での連絡先を書き置いていったことだった。

亮介は高校に合格した。甲子園の常連校である私立高校だった。あまり受験勉強をしてこなかった亮介が合格できたのは、なんとと言っても新井の推薦があったからだだった。

基町カープの面々も多く入学していた。勝次の顔もあった。

「お父さんが高校へ行っても良いって言ってくれたんだ。その代わり呉から通学することになるが一日たりとも休まないこと、学校から戻ると店を手伝うことという約束をさせられた。俺、邦彦みたいにならなくて良かったよ」

勝次は嬉しそうに言った。勝次は邦彦の件が余程堪えたのだろう。その邦彦の姿は新入生の間のどこにも見えなかった。

亮介は中学校を卒業した。再開発に伴い生徒達は四散して、入学した時に比べ卒業者は大幅に減っていた。三年間通った校舎の前で卒業写真を撮った。翌週には高校の入学式があった。卒業式、入学式も他の生徒はほとんど父兄が同伴していた。亮介はこの人生のセレモニーのどちらか一人きりだった。

ドクターの診療所が閉鎖されることになった。周囲は皆引越した後で、診療所の閉鎖は殆ど最後に近かった。

「亮ちゃん、最近自炊しているらしいじゃないの。偉いわねえ」

手伝いに来た亮介に町子さんが言った。

「ところで僕は今度は瀬戸内海の離島の診療所に行くことになったよ。今、離島は若者が都会に出るのですごい勢いで人口が減っている。典型的な過疎だよ。だからまさしく僕にふさわしい場所だね」

周囲には医療器具の入った段ボールが乱雑に散らばっている。それをドクターがチェックしながら言った。

チェックの終わった段ボールを引越し業者が次々にトラックに積んでいった。

「次は本棚だな……。おっとこれは壊れるといけないから」

ドクターは本棚からウイスキーの瓶を取り出し大事そうに診察鞆に避難させた。ドクターは笑いながら、亮介にウイソクをした。

「本は重いから無理するなよ」

ドクターはそう言いながら亮介に本を大事そうに手渡した。

昼ご飯はドクターの家でばら寿司をご馳走になった。

ばら寿司を食べながら、亮介は、ふと母の件をドクターに聞いてみる気になった。ドクターは父の同級生で友人だった。どうして早くそれを考え付かなかったのか不思議だった。

亮介が切り出した時、ドクターは困った顔をした。空気を察した町子さんは手早くバラしを片付けて台所に立ち去った。

がらんとした診療所に傾いた椅子が残っていた。ドクターは亮介を壊れた椅子に座らせた。そして診療鞆からウイスキーを取り出し一口あおった。そしてハンカチで顎髭の雫を拭きながら亮介の顔をじっと見ていた。

「……亮ちゃん。お母さんの死因はお父さんに話して貰いなさい。それについては僕は遠慮しておくよ。その代わり今日は、お父さんやお母さんや僕の若い頃の話をしてあげよう。お母さんの死因もその時代の影響が大いにあると思う。それは日本がまだ貧しかった頃の話だ……」

そう言った後、ドクターはじっと目を瞑った。亮介は身体を固くした。大きなため息とともにドクターは話し始めた。

「お父さんとお母さんは学生運動で知りあったんだ。あの頃は今では想像もつかないほ

ど学生運動が盛んだった。もともと二人は原水爆禁止運動に関わっていた。郡部出身の僕と違って、健介や圭子さんは市内出身の被爆者だ。だから原水禁運動に熱心だった。

昭和三十五年、アメリカとの間の日米安全保障条約、つまり安保条約の締結が国会で強行採決されそうになって、そっちが最優先課題となった。そこで原水禁運動はひとまず置いて我々は安保闘争の中に飛び込んでいった。安保条約は、アメリカ軍の日本での駐留を恒久化し、日本がそのアメリカの核の傘の下に入ることを意味した。それは日本が再び核戦争に巻き込まれる危険が増大するものだった。我々は毎日のように大学に泊まり、広島での安保闘争を繰り返した。又東京と広島を何度となく往復していた。

我々の反対運動にも関わらず五月十九日には安保条約は衆議院の特別委員会で強行採決された。次の参議院ではどうしても強行採決を阻止しなければならぬ。そのためには国民挙げての阻止行動が必要だった。学生は勿論、労働者や市民達何十万人のデモ隊が国会を取り囲んだ。空前の規模の参加者数だ。

そしてあの六月十五日。暴力団や右翼団体が、機動隊に紛れ込んでデモ隊を煽動し、襲撃し、怪我人が続出した。双方とも殺気だつて一触即発の状態だった。そしてとうとう国会議事堂正門前でデモ隊と機動隊の衝突が始まった。怒号と砂煙と暴力と血。

僕達広島組は東京でのアジトにしているアパートに逃げ込んだ。みんな負傷していた。医学部の学生達が懸命に治療にあたったが、包帯もなければ薬も無い。明日騒動が沈静化するのを見計らつて、それぞれが病院に行くとして、取りあえずの応急手当をするしか無かった。うめき声や悲鳴が狭いアパートの部屋に充満していた。何人かの姿が見えなかった。恐らく彼らは機動隊に拘束されたのだろう。翌日からは比較的傷の軽い者は引き続きデモに参加した。病院に行つて治療を受けた後、包帯姿でデモの隊列に戻つた者もいた。

皆、必死だった。核戦争の危険から日本を守るという使命感が僕達を駆り立てていた。負傷などものの数では無かった。死さえ恐れなかった。

しかし、六月十九日、安全保障条約は自然成立した。参議院の議決が無いままだ。岸首相は責任をとつて辞任した。

岸首相を辞任させることは出来たが、安保条約締結は阻止することが出来なかった。僕等の間に敗北感が支配した。健介や僕は、挫折感に打ちのめされた。ただ圭子さんは次の闘争に取り組んでいった。

『次は七十年安保があるわ。これは絶対に阻止しなきゃ。それまでに私達は力をつけなきゃ。私達広島の間人は出発点の原水爆禁止運動に戻らないといけないわ』
圭子さんは全然揺るがない闘士だった。

僕達は大学に戻った。僕達は大幅に遅れていた勉強に追いつかなければならなかった。その後の進路は各人それぞれだった。

健介は本来の志望だった作家になるべく復学した大学を中退して東京に出て行った。圭子さんは、広島に残って原水禁運動に打ち込んだ。その時圭子さんは健介との子供を身籠もっていた。それが亮ちゃん、君だ。

東京に出た健介はいろんな文章を書いて生計を立てた。世界中旅をして、様々な国の様々な風俗などを紹介している。中にはきわどい内容のものもあるようだ。もともと放浪癖のある彼には向いた仕事かも知れない。しかし、文章の世界で確たる自分の世界を持つ迄には至っていない。

医学部に戻った僕は猛勉強をして三回目の試験にやっと合格して医者になった。医者になった僕は迷うことなくこの町の診療所にやって来た。広島がこんなに発展したのに、この原爆スラムでは取り残された人達がその日暮らしをしている。

僕はこれからも恵まれない人達の側にそって生きていこうと思う。挫折で終わった学生運動が僕に与えた影響だろうと思う。

政治から決別した二人に比べ圭子さんは純粹な人だった。彼女は原水禁運動に戻り憑かれたように打ち込んだ。

圭子さんにとって不幸だったのは、原水禁運動が分裂したことだった。運動に政党が口を挟んできた。元々原水禁運動は市民運動から出発した。しかし、政党がその団体の膨大な票を目当てに介入してきた。

一方夫婦としての籍も入れ君をも育てた。しかし夫の健介は東京に出て行って忘れた頃家族のもとに帰る根無し草のような人生を送っている。父としての自覚もない。不安定な運動と子育ての中で圭子さんは苦しんだ。

圭子さんがおかしくなり始めたのはその頃からだ。もともとが攻撃的な人だった。そこでその矛先は頼りない健介に向かっていった。健介は政治的な人間ではなくそれが的外れなことは圭子さんにも分かっていた筈なのに。加えて最初から結婚に反対していたお婆ちゃんも娘のそれに加わった。お婆ちゃんは男勝りで圭子さん以上に攻撃的だった。健介は次第に家に寄りつかなくなった。圭子さんが自分の命を絶ったのはその頃だった。

岸政権の後に成立した池田内閣は所得倍増計画を打ち出した。政府が国民にわかりやすい形で経済成長を宣言した。日本経済は急速な高度成長をしていった。その後、現在に至る日本はこの時に敷かれた路線をほぼ踏襲している。それと共に我々が青春を賭けた学生運動は急速に衰退していった……」

ドクターは語り終わると、側のウィスキーの瓶をとり、又一口飲んだ。外は雨が降っていた。雨の音にドクターの飲んだウィスキーの喉を通るゴクリという音が聞こえた。

亮介はドクターの話を半分も理解しなかった。それは大人の世界の話で、ただ自分には母がない、父は頼りにならない、ということだけを理解した。自分がこの世で一人だけであるのを感じた。そして両親にどう言う理由があるにせよ自分の置かれた状況は理不尽なものであると思った。ただそれをどのように言葉にして良いのか分からなかった。

その私立高校は、野球の素質のある少年を広域に確保するため寮を有していた。野球部員は原則寮生活をしなければならない。しかし、強制はしていない。特に市内の野球部員は通学する者が多かった。

亮介はその寮に入ることにした。ここでは洗濯などは自分でやらなければならないが、食事はついているし、寝るところもあった。父の承諾が必要だったが、父からは直ぐに承諾書が送られてきた。ただ、補修のため新入生の入寮は三カ月先ということだった。

亮介は考えて入寮するまで自炊をすることにした。父に電話をするとその為の用具を送ると言う。父からは直ぐに大きな荷物が送られてきた。中を開けると小型の炊飯器や包丁や茶碗や箸等が入っていた。本も何冊か入っていた。『一人暮らしのための料理レシピ』という父の書いたシリーズ本だった。表紙にはにっこりと笑ってエプロンをかけた父の姿が写っていた。亮介は父の出版した本を見るのはこれが初めてだった。

その中に汚れた風呂敷包みがあった。亮介は開けてみた。風呂敷と同じ位古い手紙が入っていた。これが父の言っていた母の手紙かも知れない。しかし、手紙はあちこち破れ、字も滲み読み取れなかった。母の匂いでもするかと思っただけで嗅いでみた。しかし、吐きを催すような黴の匂いがするばかりだった。

ある土曜日の朝、インターフォンが鳴った。亮介が寝ぼけ眼で出ると、離島の診療所に赴任したドクターだった。ドクターは昨日は広島で公立の病院や診療所の会議があり、昨夜はホテルに泊まってその足で亮介の部屋にやって来たという。

「建物といい部屋といい何かユダヤ人の収容所を連想させるな」

ドクターは顎鬚を撫でながら部屋の中を見渡して言った。

「今日来たのは、この部屋を見たいのと、亮ちゃんに一つ提案があったからだ。提案と

いうのはね。亮ちゃん、島に来る気はないかい？ どうだい、島に来て僕達と一緒に暮らさないか？ 島にも高校はあるし、野球部もある。転校ということになるけど、夏休みとか年度替わりの時にすれば良い。僕には子供がいらないし、子供を育てていないことが僕の一生の悔いになっている。子育てごっこをしてみるのも良いかなと思っただ」

ドクターは、亮介の戸惑った顔を見て笑った。

「僕の方はそうだとして問題は亮ちゃんの気持だ。健介の方には僕がどうとでもカタを付ける。健介に文句は言わせない」

ドクターはこの後レストランで医者友人達と昼食をとるといふ。

「突然で悪かったな。もっと早く言えば良かったんだけど。今日はそのまま帰るよ。よく考えてみて電話をくれよ」

ドクターは帰りがけにウインクをしてみせた。

伸介は部屋の窓の側に立った。目の下はさらに退去が進み、ほとんど空っぽになった空間が広がっていた。その向こう黒々と蹲ったように見えるのは建築中の図書館や青年センターだった。その向こうには市民球場が輝いている。春の到来と共にプロ野球の試合も始まった。今日は読売ジャイアンツとの試合がある。窓を開けると、風と共に観客の歓声や応援の太鼓の音が聞こえてくる。

『自分はどうすれば良いのだろう』

亮介は思った。母も婆ちゃんも死に、父は四十歳を過ぎながら自分の居所がまだ見つからないでいる。自分はずっとこのまま学校の寮で過ごすしか無いのであろうか。寮が閉まる夏休みなどどこへ帰れば良いのだろうか。ドクターの話はどうだろう。父が今の儘ならドクターにお世話になるのが一番かもしれない。しかし離島の高校では野球部のレベルなどたかが知れている。自分の野球選手への夢はあきらめなければならぬかもしれない。

生まれて十五年しか経っていないのに、これから長い人生が待っているのに亮介は自分が八方塞りであるのを感じた。

亮介はふと思いついて屋上に上がっていった。市民球場の試合がよく見れるのではないかと思った。しかし、球場で練り広げられている試合迄は見れなかった。ただ歓声とそれに続く太鼓の音が一段と大きく聞こえた。

空は晴れ渡っていた。風が強かった。空には飛行機雲がかかっていた。雲は微動ともしない。まだ生まれたばかりの若い雲で風の強さにも負けていなかった。雲はくつきり

した垂直な線を長くのびやかに伸ばしていた。

ふと気がつくと二羽の鳩が屋上を歩いていた。鳩達は何も食べるものは無い筈なのにコンクリートの床を突つつきながら歩き回っていた。一羽の鳩が突然柵に飛び上った。亮介の佇む側だった。亮介は手を伸ばして鳩に触ろうとした。もうちょっとで鳩に触れることができた。亮介は又手を伸ばしてみた。

その瞬間、亮介は自分の身体がグラリと前のめりになるのを感じた。次に宙に投げ出されたのを感じた。『なんだ、これは』と思った。『自分は墜落しているのか？ 自分は死ぬのか？』と思った。恐怖は無かった。『ひよつとしてお母さんもこんな風に死んだのかな』と思った。これで母に会えるとも思った。『これでお母さんの本当の顔も見えるし声も聞こえる。お母さんにも触れられる』。

眼の端を飛行機雲が踊っていた。球場からはまたどっと大きな歓声がかかるのが聞こえてきた。